哲學研究　第百六十五號



# 藤樹學（下）

## ―その發展とその意義―

加藤仁平

目次

第一章　藤樹の修學
第二章　前期藤樹學（朱子學的藤樹學）　以上前號
第三章　後期藤樹學（陽明學的藤樹學）
　第一節　王龍溪語錄と翁問答　三十三、四歳
　第二節　伊勢參宮と格套の離脱　三十四、五歳
　第三節　熊澤伯繼の入門　三十四、五歳
　第四節　陽明全集と藤樹の悟入　三十七、八、九歳
　第五節　大成期の藤樹學　三十九―四十一歳
第四章　結論

## 第三章　後期藤樹學(陽明學的藤樹學)

### 第一節　王龍溪語錄と翁問答

三十三歳の冬王龍溪語錄を得た。始め之を讀むとき其の觸發することの多きを悅んだが、其の佛語を間雜し禪學に近きことを恐れた。この語錄は藤樹が始めて陽明學に接したといふ點に於て藤樹學史上の意味をもつ。殊に陽明學的思考が藤樹學の本質を形成すると見らるゝ限り、日本思想史上極めて重要なる意味をもつ。陽明並に陽明派の著書は之より遙に早く我が邦に舶載されてゐたのであるが、田舍で獨學してゐた藤樹は未だこれを知らなかつたのである。

この語錄は間もなく藤樹の著述に利用されたらしく、年譜に三十二歳の著述とされてゐる論語鄕黨啓蒙翼傳の中に、食饐而餲せる節の註に云ふ所の師を相くるの道は、龍溪南遊會記の說に原づき、寢不尸の節の註に、方に一日の用を殼にするの數句は、龍溪三山麗澤錄の語を全用したものであるとの理由から、篠原元博は翼傳の著作年代を三十二歳の秋から始つて三十三歳以後に成就したことを證明してゐる程である。(全一、五〇〇頁)この語錄による藤樹學動搖のきざしは三十三四歳頃の翁問答から明かに見えてゐる。

岡田氏本年譜によれば、後、陽明全集を得て之を讀むに至つて、龍溪の禪學に近からざることを知り、且つ佛語を間雜するの世を憫むの深きことを見た。何となれば、聖人一貫の學もと大虛を以て準則とし、老佛の學も皆一貫の中を離れず、唯精粗大小あるのみ。且つ當時佛を學ぶの徒が多いから、其の語を間雜して其の外にせざることを示し、皆大虛一貫の道を悟らしめんことを欲するものであるといふのである。（他の二年譜も大同小異）

佛敎に對するかうした態度は、三十九歲丙戌秋、中川貞良の老母の佛敎的な質問に答へて、佛敎的立場を承認しつゝ之を心學へ誘導して、

后生の事一大事と思召由御尤ニ存候、后生一大事なれば、今生猶一大事にて御座候、いかんとなれバ今生の心まよひぬれバ后生惡趣にをもむく理ある故ニて候、仰の如く后生一大事と佛の敎へ給ふも、今生の心を明にさせん爲にて御座候、大乘の法門ハ皆々の心得にて御座候、あしたゆふべをはかり難き浮世にて御座候へバ、心の中の如來を拜したまはん事何より以て大切なる御事ニ御座候。（全二、四三七頁）

と敎へたところや、四十歲丁亥の中川子老母に答へて「仰下され候ごとく後生一大事

に御座候、うか〳〵と御ねがひなされ候ぶんにてハ一大事はづれ可申候、今生後生一大事ハたゞ心に御座候、よく〳〵御聞とゞけなさるべく候」（全二、五三〇—一頁）といつた書簡や、年代未詳の與「牛原氏老母」に「吾人不動心、不滯物少も他念起らざる時、如何にも快よくゆう〳〵とゆたかに有ものにて候、是卽明德の本體、佛法に所謂如來と申候は此心にて御座候」（全二、四六一頁）といひ常に養ひそだてゝ臨終に於て「たとへばふしぐを錐にてもむ程の苦み有とも、其苦に犯され如來心をば失ふ間舖物をと能々御心を御戒可有之候」（同四六二頁）などといつたところに、認められることで、三十三、四歳頃の翁問答に於ける攻擊的態度に比較すれば、明かに彼の佛敎觀の變遷と敎育家的態度の圓熟とを物語つてゐる。

吾人はこの點から見て鑑草並に春風に於ける佛敎觀も三十七歳陽明全集を讀んでからのものだらうと思ふ。少くとも他に反證の擧らざるかぎりは。吾人は又翁問答時代までの彼が排佛的態度に近世的意義を見出し、陽明全集繙讀以後の內面的理解に伴ふ包容的態度に、彼が學問的敎育的個性を讀むことさへ出來るであらう。

王龍溪語錄の藤樹に與へた重要なる意味は、故に三つある。一は陽明學を初めて傳へたこと、二は藤樹の佛敎觀を轉換せしめる一要素となつたこと、三は藤樹の敎育

方法(特に女子教育の)を洗練する一助となつたことこれである。右の他、論語解の頭注に、原田氏本此の下次の王龍溪語錄の語を載す。或は先生平日門弟に示されしものかとして、語錄十卷、答吳悟齋書中の一貫の條を附載してゐるが如き(全二、九〇頁)も語錄の藤樹塾に與へた意味の一である。

三十三四歲の頃豫州の同志から「先覺に離て刑儀をうしなひ、又文學につたなければ經書の觸發をも得べからずとなげきて惑を辨へ德に入べき方を假名書にして與へたまへ」と希はれて、その多くは二三百石とりである大洲藩士等の爲めに編述した翁問答は、上述の如く王龍溪語錄によつて藤樹が朱子學より陽明學へ動搖しつゝあつた過渡期に際會したもので、初めて良知の語を用ゐ、陽明を賢人の中に計上しつゝ、程朱を數へざる程になつてゐながら、未だ致良知の語を用ゐず、舊によつて明明德の語を用ゐてゐた。此の翁問答を修養書として見ても既に二、三年後の三十六歲癸未秋、答森村伯仁に於て

取入ののみこみは翁問答にも大方は御座候へ共十分に親切に無御座候間不文字成同志の爲に心法の書をかな書に可仕と存候間出來申候はゞ下し可申候云云(全二、五〇八頁)

と自ら評價してゐる程で、晩年には更に進んで當年は學未だ精到ならず、且つ聖道の行はれざるを憂ひ、末學の弊を救はんとした爲めに、其の議論抑揚甚だしく終に圭角の累を免れず、讀む人若しその本意を悟らずんば却つて勝心を助けんかと恐れ（全三、二七七頁）此の書志氣あつて世を憤り弊を憂ふる的の人讀まば或は觸發興起あらんか、心術の精微、用功下手の實地の如きは未だ委しく論じ及ばず（全三、二七八頁）といふに至つた。漸次彼の學問が精到になつて行つたことを見ると共に、勝心を去り圭角をすてるところに、彼の修養の道程があつたことをこゝでも亦物語つてゐる。

斯くの如く彼自らは不滿を感じたものであり、晩年に至つても一部だけしか訂正出來なかつたものではあるが、早くから出版されて廣く讀まれ、後世に及ぼした影響も亦極めて大いなるもので、藤樹の日本教育史上に於ける意義の一は少くともこゝに見出されねばならない。山崎美成がその著世事百談に、假名書ではあるが、實に類ひなき心法傳授の書ともいふべく、今心學といふものが行はれるけれども、心法の學ははやく藤樹に起つた。心學の書くさ〴〵ある中にこの翁問答に及ぶものはない（卷之三、天保十四年刊、全五、五〇九頁）と適切に批評してゐる如く、心法傳授の書としては類ひなきものであり、石門の心學道話等に比して遙に高級なものである。

翁問答は眞蹟の草稿もなく、その後屢々書き變へられてゐるから、三十三、四歳頃の草稿その儘を知るに由ないが、大體慶安二年本はそれに近いものと推定されてゐる。從つて吾人はこの慶安二年本を以て、少くとも後期藤樹學初年の面影とその時代の藤樹敎育の一班とを窺ふことが出來る。藤樹學を以て心學と稱へたのは三十五歳壬午之歳旦に、

愚窃有志于心學、於江西藤樹下之草廬與同志相切磋琢磨者、有年于是、（全一、九一頁）

とあるのが、早い用例と思はれるが、上述の如く、慶安二年本を以て三十三、四歳を代表し得ると見れば心學の語は、翁問答から始つたと見なくてはならぬ。（「心法」の語は三十歳春、送池田子に講論大學之心法として用ゐてゐる。）これによれば「聖賢四書五經の心をかゞみとして、我心をたゞしくするは、始終こと〴〵く心のうへの學」（全三、一〇九頁）であるから心學と名づけたもので、口耳の學や俗學に對立する聖學であり、正眞のがくもんである。武士でも、心學をよくきはめたる者は義理をかたく守つて邪欲がないから世間の作法にあやかる事がない。（全三、二〇〇頁）眞儒の心學をよく切磋琢磨して大覺明悟の位に至れば莊子釋迦達磨などの心を觀察することも白晝に黑白を別つが如くである。（全三、二一五頁）

三十三歳にして陽明の心學に接し、三十三、四歳にしてかくまで熟心に心學を主張したところには、兩者の間に因果關係があらうけれども、彼は意識的に陸王のみを心學と呼んだのではないと思ふ。鑑草卷之四にも「父大中公大智あきらかにおはしければ周子の大賢を見しりて二程をつかはして心學をうけしめ給ふ」(全三、四一三頁)とさへ書いてゐる。

湖西の足立漁叟によつて書かれた續翁問答七卷は一種の陋言腐語を造作したもの、勿論、藤樹の翁問答と比すべきではないが、享保戊申の年に刊行されたもので、後者の影響を物語る點に於て、歴史的意義をもつ。(湖學紀聞、全五、三九一頁)翁問答の拔萃本としての藤樹先生精言(全三、四七三頁)や、文武問答(全三、五〇三頁)が版行されたことは、藤樹の心學を普及する上に重大な意義をもつたことに違ひない。若し夫れ藤樹が本書に於て文武の問答に少からぬ頁を割いたが如きは本書著述の動機から本書の讀者を一考すれば容易に了解されるであらう。

附言、翁問答に關しては西博士の前掲論文、高橋俊乘氏の全三、解題、及び改訂版日本教育史二四三頁をも參照されたい。何れも翁問答を以て略全藤樹學を代表させ得るといふ立場から取扱はれてゐる。

## 第二節　伊勢參宮と格套の離脱

三十四歳の夏、二三子と共に伊勢大神宮に參詣した。從來、神明は無上の至尊であるから賤士にして之に近づくは馴れて瀆れを致すの恐れありとして、神に詣拜しなかつたが、其の後、學日々に精微に入つて、士庶人も亦神を祭るの禮あるを知つて、參詣の必要を覺えた。且つ太神宮は吾が朝開闢の元祖であるから日本に生るゝ者は一たび拜せずんばあるべからずと考へて、是に於て詣したのである。（岡田）三十三歳以來の藤樹の宗教觀の發展を伺ふべく、更に日本に生るゝ者の自覺に基いた、國祖に對する意識の發現を見るべきである。

尤も一時代後れてゐる伯繼や闇齋や素行に於けるが如き明かな名分の觀念をもつた國體觀でないことはいふまでもない。この三人者中年代の最も明確にして國體觀確立の最も早いかと思はれるのは最年少の素行であるが、彼が十七歳にして神道傳授を受けたのが、藤樹の三十一歳に當り、四十八歳中朝事實に於て初めて國體觀念を決定したのは藤樹の伊勢參宮より實に二十八年後のことである。吾人は藤樹が三十四歳に達するまで我が邦の神明に近づかなかつたことゝ宗廟に參詣しても國體觀念の比較的強くなかつたことゝの原因として、藤樹の學問的教養が單純であり、朱子學的信念が純粹であつたのを看取し得ると共に、國體觀の一點については近

世日本思想史が當年に於ては尙未だ三四十年後の如く高潮期に達してゐなかつたからであると思ふ。

ともあれ、本年參宮したことは一面から見れば彼の三十三歲以來の大乙神を祭る宗敎的精神とも、三十四歲以後の朱學の格套を離脫してそれのみに拘泥せざる包容的態度とも、それ〴〵の點に於て一脈の相通ずるものがある。從つて三十三四五歲頃の心的動搖は藤樹悟入の先驅時代を物語るものとして、藤樹學史上重大なる意義をもつてゐると思ふ。（全集編纂主任が三十三歲から三十六歲までを別種の見地より王學模索時代として規定されたのも參考するに足る。全一、一五七頁。）

岡田氏本年譜によれば三十二歲に於ても「夏小學ヲ講ズ。明年ノ冬ニ至テ終ル。諸生專ラ格套ヲ守ル」（川田氏本には格套をいはず、會津本では講小學諸生守格法とある）とあり、三十四歲の條にも

此ヨリ前專ラ朱註ヲ尊信〻日ニ講明之小學ノ法ヲ以テ門人ニ示ス。是故ニ門人格套ニ落在シ拘攣日ニ長ジテ氣象漸ク迫レリ。或ハ圭角アリテ同志ノ際ナヲ融通セズ。（會津本大同小異）

といふ格套に伴ふ弊害が見えてゐるが、三十四歲に至つて始めて專ら格套を守るの

非なる事を覺り、眞性活潑の體を失ふものとして、只吾人拘攣の意を放ち去り、みづから本心を信じて其の迹に泥むことなからんを主張し、門人大いに觸發興起したといふ。朱學より王學へ轉じた藤樹學の步みが敎育に對してもかく交涉をもつたのである。（廿八歲の歸省に伴ふ進境や、卅一歲の五經に於ける發展や、何れも格套離脫の豫備的現象たるを暗示してゐるが、卅三歲以來の宗敎的態度に加ふるに朱學に對立する王學に接融したことが、終に今日の結果を齎らしたのであらう。）

三十四歲の某日、夢に人あつて、藤樹に光嘿軒と云ふ號を授けたが、之を門人に語つて「光嘿ノ號、吾ニ過ギタリ、只嘿軒可ナリ」と云つて、此れから自ら嘿軒と稱した（岡田川田氏本大同小異、但し嘿軒を默軒に作る。兩年譜ともに格套離脫より後に記されてゐる）といふ。彼は後年淵岡山等に敎へて「吾人之心之位は夜中之夢にて試たるがよき」といつた程であるから、吾人は德光あつて下位に默するといふこの夢によつて、當年の彼が心之位を察することが出來る。上來述べ來つた如く、三十四歲は初めて格套を離脫したり、神宮に參詣したりした年でもあり、旣に陽明學にも接してゐるのであるから、意識的にも無意識的にも修養の進境は顯著なるものであつたであらう。

三十四五歲で孝經啓蒙を著し、三十五歲の送中川子では全孝心法を賦して躬行を求め、送橫山子では孝經之心法を賦して「愛敬順時百事公」と歌つてゐる。年譜によれ

ば三十五歳の頃は專ら孝經を講明して常に愛敬の二字を掲げ出して心體を體認せしめたとある。

心ノ本體原是愛敬的、猶水ノ濕ニシタガイ火ノ燥ニツクガ如シ。只吾人種々ノ習心習氣ニ凝滯セラレテ心體ノ明蔽ハル。然レモ親ヲ愛シ兄ヲ敬スルノ心且赤子ヲ見テ慈愛スルノ心ノゴトキハイマダ滅セズ。時アツテ發見ス。此心ヲ認テ存養〆失ザルトキハ則チ聖人ノ心也。（岡田）

かうした心體存養の態度と朱子學的格套の離脱とは論語を研究するに當つても現はれて來る。この年、小川子の論語述而篇、文莫吾猶人也章の疑問に答へて

雖於集註之評、則得其當、而於正經之主意、無體認之質問是何言也、是何言也、如許之末務、素非吾之所以望於子、子亦素非甚所志、顧以未免專以集註爲主本之固、故有此皮膚之問而已、蓋經有心、有迹、有訓詁、學訓詁而講明其迹者、初學未知文字者之所務也、已曉文義、則專於正經上體察玩索、須求心々融會之妙、而后當有吾所望之疑若不如此用工、則與俗學相違不能以寸矣。（全一、一六九頁）

といつたのも注意せられねばならぬ。三十二三歳の頃論語鄉黨啓蒙翼傳に於て既に心迹の分別を說いた藤樹は三十三四歳の翁問答に於ては心迹訓詁を區別して、四

書五經に心と迹と訓詁と三つの別があつて、聖賢の口にのべたまふ辭と、身におこなひたまふ事との二つを迹と云ひ、その口にのべ、身におこなひたまふところの本意の至善を心といふ。心は無方無體無聲無臭にして書き付ける事あたはざる故に、只あとばかりをかきつけて、そのあとのうちにふくみそなへて、後世のをしへとした。そのあとのうちにそなはりたる心を、四書五經のこゝろといひそのあとをかきのせたる四書五經の文字のことはりを訓詁と云ふ（全三、一〇八頁）といつたが、更に三十五歳に於てはこれまでの發展を遂げたのである。こゝに吾人は集注之評と正經之主意との對立を見、末務と體認之質問との對立を見る。集注を以て主本と爲した從來の朱子學的藤樹學は、今や文字を知らざる者の務むる皮膚として離脱せられ、專ら正經の上に於て、體察玩索して、心々融會の妙を求めんとする後期藤樹學に向つて行つたのである。單なる陽明學の受賣にあらずして、陽明學的な思考や修養そのものが、當年の藤樹塾に於て敎師の生徒に望むところであり、生徒の志すべきところでもあつたのである。

この態度は陽明學的修養の進むと共に益々進み行いた。三十八歳小川子に答へて、讀書をば第二にして心裏の良知をよく體認すべきことを敎へ、己が良知を見着せ

ずして徒に經書を究むるは譬へば本經の文字讀を知らずして徒に註解の訓詁を講究するが如く、かくして本經を會得したる人は古來未だ曾て無いといつてゐるのを以て知るべきだ。（全二、四〇六頁）四十歳の小川に與へたところでも經書は本心の註解だから面々の心に註解のごとくなる本經ありや否とよく讀んで、一字なりとも本經を心に守るやうにといつてゐる。（全二、五一八頁）

## 第三節　熊澤伯繼の入門

この程度まで藤樹の學と德と從つて又、藤樹塾の塾風とが進んだ年の冬、熊澤伯繼が始めて藤樹門の人となつた。岡田氏本年譜によれば、秋始めて來つて入をして謁を請うたが、藤樹はその志の眞僞を知らざるが故に之を固辭した。左七猶請うて已まず、更に書を以て之を辭したが、左七三たび請うて「タトヒ敎ニ與ラズトイフトモ如何ゾ一タビ拜謁スル事ヲ計サヾル」と、其の情甚だ愁へて涙を滴るに至つたから藤樹其の情狀を聞知してこれを憐み謁することを許した。而も尙業を受ることを許さず、强ひて之を歸らしめた。冬又來つて固く請うて已まず是に於て終に業を授けたといふ。（會津本年譜はこの記事をそのまゝ漢譯したやうなものを載せてゐる。）

何故熊澤に限つてこれほどに固く辭退したかも問題であるが、――熊澤の才氣煥

發なるに因るかといふ加藤盛一氏の推測も傾聽するに足らんか――集義外書の自傳にはこれより一年後れて廿四歳のことゝしてある。卽ち

二十四乃七月高嶋に行て中江氏ゟ逢てうたりハしき事をとふ。歸て又九月ゟ高嶋ゟ行て來年乃四月まて居て孝經大學中庸を學ひき。（集義外書卷之六）

とあるのが、それである。藤樹三十五歳の壬午之夏に熊澤子の豫方に行かんとするを送つたところによれば（果して豫方に行つたか否かは史料の徵すべきものがない）

今吾於熊澤子、似以性命相友愛者、是以愚雖无不弧之德、往年辛巳之秋、謬與有隣之訪、而推其所以相識之由、有同聲相應、同氣相求之機焉、人乎天也、故講習討論、心心相通融、而甚喜得輔仁之益、莫逆之寄趣、今逮中庸之講終篇而皈省、因賦中庸要旨以竊比於送言之事（全一、九二頁）

といふのであるから、中庸を最後に講じたとや、藤樹が伯繼を他の門人に比して重視してゐたこと並にかゝる鋭才に對して彼が如何なる指導法を用ゐたかが窺はれる。

集義外書によれば爾後家の事情に妨げられて京都にも西江州にも行くことかなはず、家極めて貧にして獨學五年に及んだが――此の點のみならず右送行詩並に藤樹の書簡と、和書外書との間に幾分の疑問がある。――其の頃「中江氏王子乃書を見て

良知の旨をよろこひ予よも亦さとされき。こゝによりて大よ心法乃力を得ゝり」（集義外書卷之六）といふ。藤樹三十六歳伯繼二十五歳の癸未春の與熊澤伯繼にも、

かりそめにも中和の心法御失念なき樣に御體認御尤に存候、何にても好、格、套、を心に守り候も倚にて候無意無必無固無我が中和の本にて御座候（全二、五五〇頁）

と敎へて、格套から超越した藤樹學によつて伯繼學が基礎を固めさせられてをることを示してゐる。同年の答岡村伯忠にも「左七其元に御入候に付今程心學に御志被成候旨、御尤ながら感入申候（全二、五〇三頁）」とあり、三十七歳以後の答一尾子にも「熊澤子同志中之巨擘に御座候まゝ指南御望御尤に奉存候」（全二、五三〇頁）とあるから、左七が藤樹の高弟として心學の指導者であつたことを認むべく、右の答岡村伯忠に、

文字を覺へ古事をひろく覺へ申ことハ人の氣質によりて成やすきと難きと御座候、中和の本心を守り申工夫は志だにかたく立候へば賢知愚不肖のへだて無御座候、人皆堯舜たるべきとハ此事にて御座候、能々御體認可被成候（全二、五〇三頁）

とあるところに、當年中和の心法を中心として敎育してゐたことが知られ、知育には限界が多いが、德育には無限の可能性のあることを主張してゐたことが認められる。こゝにも徂徠派などとの著しい差別がある。

同年秋の答森伯仁にも「左七御下なく獨學難成との儀御尤ニ存候、さはりだに除候はゞ御下候樣に可仕候」(全二、五〇八頁)とあつて、藤樹の生前に於てもその派の發展に左七の力の加つてゐたことを想はしめる。年代は詳かでないが、九月初日附の與熊澤佐七にも、左七の周圍に奇特なる志學の者十四五輩もあることを記し「汚俗之中にて左樣の志は嘿止がたき儀であるから、少し心法の位を合點したほどの者は、御とりたて御尤ニ奉存候」といつてゐる。備前候に仕へてゐた頃の事であらう。伯繼の推擧によつて實際に備藩に力を得た藤樹門下は少くない。同書簡では大學の敎授法を述べて日數を久しくかけこまやかに講義し、初學の者には文義をば大略に講じ、主意と日用心法の引合とをいかにも耳ちかくこまやかにするがよいと注意してゐる。

同じく年代未詳の與熊澤(全二、五五二頁三十七歲以後のものには違ひない)には「頃來知止の功別て親切ニ覺申候、貴樣御體驗如何、淵子御下候條不及細筆候、近來ノ發明ども淵子ニ御聞可被成候」として近來の發明を淵岡山を通して伯繼に傳へてゐる。三十九歲春の答中村重に「無事の時ハ中庸の工程により、有事の時ハ大學の工程により、工夫間斷なければ必止を知もの也」(全二、四二七頁)と見えてをり岡山の入門が三十七歲の冬であるから、多分三十八九歲に於ける藤樹學の進展を語るものであらう。伯繼が直接江西に

於て指導を受けてゐた頃は、未だ藤樹學の動搖時代であつたが、岡山の入門した三十七歳の冬には既に陽明全集にも接して、藤樹學の大成期に入りかけてゐたし、彼はその大成期を通じて直接指導を受けてゐた。この事はその性格や天分と相俟つて、後年兩人の學風に大きな差異を生ずる一の原因となつて、藤樹學派の二大傾向を發現させたやうに思ふ。伯繼は江西學派たるを自ら屑しとせず、必ずしも藤樹にも（註一）陽明にも（註二）捉はれず心學者たるを嫌つた程であるが（註三）岡山の學を講ずるや藤樹學を以て千聖不傳の祕を得たものと見て、その眞傳を天下後世に傳へんことを期した。さればその子孫亦相繼いで藤樹學を講じ、孜々として怠らず、その學は京都を中心として江戸會津伊勢大阪等に綿々として絶えなかつた。（會津藤樹學道統譜）

註一　集義和書卷十三に、心友の質問として「先生は先師中江氏の言を用ひずして、自の是をたて給へる高慢なりと申者あり」と見え、伯繼自らは「予が先師に受けてたがはざるものは實義なり、學術言行の未熟なると、時所位に應ずるとは日をかされて熟し時に當りて變通すべし云々」と答へてゐる。又集義外書卷之二にも「人の申候ハ貴老は江西よ學給へとも江西乃學よあらずといかゞ其故御座候哉」の來書に對して「諸子ハ極りある所を學び、愚ハ極ぎなき所を學び候、其時よハ大小たがひなく候ても、今ハ大よたがひ申べく候云々」と返信してゐる。

註二　集義和書卷第八に「愚は朱子にも取らず陽明にも取らず、たゞ古の聖人に取りて用ひ得るなり。」（外書卷之八も同じ）といつてゐり、集義外書卷之六には「貴老をも王子乃學者と申者あり」の問に對して然らずと答へてゐる。

註三　集義和書卷第一に「拙者をも世間には心學者と申すと承り候、初學の時心得ぞこなひて、自ら招きたることに候へども心學の名目しかるべからず存じ候」とある。

## 第四節　陽明全集と藤樹の悟入

門人等に與へた送行詩や、每年の歲旦詩などに於て、自らの學的地位、修養の境地を規定してゐるのは、對手によつて謙遜の程度に差異もあらうが、之によつても大略の進展過程を讀むことは出來ると思ふ。

三十五歲の原謹以邇言餞熊澤子之行には「不佞雖非溫故知新者、二三同志謬推以爲句讀之師、不得已而竊依惟斆學半、念終始典于學之法言、而常恐或有誤后學、若踏虎尾涉于春氷、熊澤子亦有此招」(全一、一七三頁)といつたやうな謙遜な態度が現はれてゐるが、かくまでに卑下せざるを得なかつたのは伯繼その人が他の門人と異つた傑物であつたからでもあらうが、一には當時の藤樹に於ける自得と自信とが充分でなかつたからであらうと思ふ。かくて、三十七歲春の「佃子遠辱心友之訪、而謬請聖室之指引、僕雖非得其門者、竊舉所聞以抒倒屣之情」(全一、一八二頁、送佃子)を經て、同年の「古曰、大覺覺于小覺、小覺覺于無覺、僕非有小覺者、略知好聖人之學而已、然國領子謬以余爲先輩、而遠來訪學術、於是不得已而揭學脈以講論之」(全一、一八八頁、送國領子)に進み、同年冬陽明全集を得て

觸發し、翌三十八歲乙丑之歲旦には、一段の進境と共に憤悱を發して

古來難聞者道、天下難得者同志、而同志數輩相遇、講心學於江西之僻壤、誠可謂大幸也、然唯慚未克有道義於身而已矣、今乙酉之歲朔至、而春未立、恰似吾人有志而極未立、肆綴鄙詩一絕以勵講習之務云爾、

習若密雲名利埃、何時白日青天開、
吾人學問似今旦、朔已雖來春未回、（全一、九五頁）（註）

といふに至つた。同年夏の送中西子では積極的に自らの修養の不足を恥ぢずして唯敎育的感化の不足のみを述べて「中西子謬不吾鄙、遠辱輔仁之訪、不佞雖不能成其美而喜益友之奇遇、而相與講習討論以得摩勵之助」（全一、一九三頁）といひ、翌三十九歲丙戌之歲旦には、更に憤悱を進めて、

二三同志賴天之靈幸、講習一貫之學術、而未能得仁、唯辨天下第一等事在於茲、而僅超脫世情之拘攣、而竊比於說之皮膚、以庶幾將來之眞樂而已、惟時丙戌之新正、同志相聚嘉三元、於是賦卽景卽事以爲試翰之事云爾、

霞簇四山和氣新、梅花柳色僉成眞
今朝堂上三行酒、同志唯喜春外春、（全一、九六頁）

とまで斷言し得るに至つた。

註　此の眞蹟は全集の編纂中にはその所在のみならず存在することすら知られなかつたのであるが、最近京都の美術倶樂部で催された外村家の賣立に出て遂に大阪市北區旅籠町田中宗一氏の愛翫に歸することになつたといふ事を加藤盛一氏から耳にした。

かくして遂に三十九歳の夏四月三十日夫人高橋氏を失つたことが、修養の進路を早めたことは九月二十三日付與晦養軒（全二、五三四頁）によつて想像される。「勢州ニ戻申候内大切之煩之樣ニ申來候故取急罷歸候へ共二日相後レ候て殘念御察可被下候」といふのが享年二十六歳の貞節な夫人を追懷したもので「其上兒女も餘多候て悲情難儀仕候」といふところに乳呑兒（この年春正月二十五日次男鐺出生）を抱へて苦しんでゐる藤樹の生活が察せられる。「且學道之憤悱も出來候て世間たぐひまれなる境界ニ罷成候」（嚴密にいへば學道之憤悱は三十七歳陽明全集に感激してから、漸次出來たもので、三十八歳の書簡類には修養の進度が現はれ、更に三十九歳春の諸書簡の特色と見るべき知止の功夫など進歩の顯著なるものがあり、次いで三十九歳夫人の死と餘多の兒女との與へた事上磨練の機會は愈〻憤悱の度を高めて終に世間たぐひまれなる境界となつたのであらう）といふ過程の後に、

志ハ大にすゝみ申候、二三年たゆみ不申候て凡情はまぬがれ可申と此上之たの

しみに御座候、聖人發憤忘食、仁遠カランヤ、吾仁ヲ欲して仁至ル。能一日も其力を仁に用ヿアレヤ、吾未力ノ不足者ヲ不見と被仰事候。身ニ致承當氣味に成候。（全二、五三五頁）

といふやうな驚くべき境地に到達したのであつた。殊に「此方近日別而すゝみ申候、同志四五輩出來數々靜坐議論候てたのしみ罷過候、此頃之風味は夏頃（昨年か）懸御目候節とはよほどかはり申候」といふあたり、遠からぬ過去から九月二十三日までの間に一大飛躍のあつたことは疑はれぬ。而も書中の偶成に、

觸波不散碧潭月、　就手漸馴朱蹄駒、
經歷人間多少險、　老來始得出天衢、（五三五頁）

と歌つてゐるのであるから「近日別而すゝみ申候」といふ一大飛躍は夫人の死を中心とせる人間多少の險をも假定せずしては正しく理解されないであらう。

かうした體驗を得た藤樹がその修養過程を記述しつゝ「勢ひニまかせ近年之內致上京候て互のすゝみも申承度候」（全二、五三五頁）と述べてゐるあたり、師と弟子との間の火花を散さんずるばかりの敎育的接觸が暗示されてゐる。而して「何事も筆にはのべがたく候、彌被入御精べく候、とかく聖賢の地ニいたる人まれに御座候、凡情ニ出入

いたし候てハおもしろからず候、尙追々可得賢慮候」（全二、五三六頁）といふ含蓄のある言葉でこの書簡は終つてゐる。

この書簡に所謂三十九歳時代に於ける學道の憤悱については四十一歳の與池田子（全二、四四〇頁）をも併せて考へなくてはならぬ。之によれば、深く朱學を信じて年久しく工夫を用ひたけれども、入德の效おぼつかなくて學術に疑が出來、憤のひらけ難きおりふし

天道のめぐみにや陽明全集と申書わたり買取熟讀仕候へバ拙子疑の如く發明ども御座候て憤ひらけちと入德の櫛柄手ニ入申樣に覺、一生の大幸言語道斷に候、此一助無御座候はゞ此生をむなしく可仕にと有難奉存候

と自覺するに至つた。而も陽明といふ先覺が世に出て、朱學の非を指點し、孔門嫡派の學術を發明したと藤樹が信じたその要點は「大學古本を信じ、致知ノ知を良知と解しめされ候、此發明によつて開悟の樣に覺へ申候」といふところにある。同じく陽明學の三綱領と言はれながらも、大成期に於ける藤樹學の本質はその心卽理や知行合一ではなくて、實に陽明の最も重視した致良知にあつたのである。（但し知行合一論などをも無視しなかつたことは中庸續解解題參看、全二、九六頁）こゝに陽明全集を熟讀した後に始めて憤のひ

けたことをいつてをるのを見ても、三十九歳の四月以後、志が大いに進んだことを意識したのを見ても、將た又當年書き殘した幾多の書簡や感想から推しても(始めて陽明全集を讀んだのが二十歳から三十歳迄の間でないことを窺ひ得ると同時に)陽明學の眞の體認が初めて讀んだ三十七歳にあるのではなくして、實に體驗を重ねた三十九歳に於てゞあることを考へねばならぬ。藤樹學史上に於ける三十九歳の意義は極めて大いなるものがある。

藤樹の歿後七十四年、享保七年壬寅十月中旬に三輪執齋が謹書した藤樹全書國字序には、

廣く書肆をさぐりて、陽明全書の始て本邦ニ渡りぬるを得たり。詳覽熟讀して數年の疑惑盡く解釋す。こゝに於て聖門楷梯の適路を陽明夫子致良知の學に得て、其敎に從ふこと數年、超然として默會し、其心傳を本邦百年の後に接せり。

(全五、三五六—七頁、湖學雜纂)

と記してをり、更に三年後の同氏藤樹先生全書序には、稍精細に

一日探書肆、遇陽明全書始入本邦、及一見、數年之疑難、渙然氷釋、眞如大寢得醒矣、仍欲獲此書、而家實貧困無可以宛書價、乃脫所帶大刀、而充之、手親携笈歸焉、詳覽熟讀、

殆忘寢食、於是從事致良知之訓數年矣、超然默會、沛然融釋、得接其心傳於本邦百餘年後也、（全五、三五五頁）

と記してゐる。――岡田氏本年譜によれば二十九歳以後再び洛に行かずと見えて居る。此記事が事實であるとすれば一日探書肆の記事は何處を指すのであらうか。ともかく此の記述は二十九歳以後洛に出でたか否かの問題と共に餘程吟味を要する點である。――執齋は藤樹の歿してから二十一年後に生れた人であるから右二篇の所說が史料としてどこまで確實なものであるか明かでないし、三十七歳と三十九歳との心的過程の差異などに嚴密な興味を以て書いたものでもなからうが、藤樹が陽明全集を一見しただけのところでは數年來の疑難が渙然として氷釋し、眞に大寢の醒を得たるが如しといふ程度の劃期的意味をもつただけであつて、更に家に歸つて詳覽熟讀して、殆ど寢食を忘れ、致良知の訓に從事すること數年にして始めて超然として默會し、沛然として融釋し、其の心傳を本邦百餘年の後に接するを得たといふ重大なる歷史的意味を獲得するに至つたと考へた執齋の所見は少くとも三十七歳と三十九歳との二點に夫れ〴〵別種の意味を見出さんとする上述の思見に反對するものではない。

要するに藤樹學の大成期は三十七歳陽明全集に接してから(書簡などに現はれたところでは三十八歳から)と見ることも出來るが、嚴密には三十九歳からの二三年を以て之に擬すべきであらう。

前に引いた池田子に與へた書簡には

今ほど興起ノ同志數多御座候て日々令講論候、就其同志中興行にて拙子屋敷をかひひろめ講會の書院を立申に相極、今ほど材木など調申候、私ニ立申學校を書院と申候(全二、四四三頁)

といふ教育史上有名な藤樹書院の建立を報じたあとでこの悟道に伴ふ教育家的愛情と教育的自信とを述べて(與吉田新、三十九歳、四十歳にもこの態度少しく見ゆ——全二、四三一—二頁)

何とぞなされ二三年の内に御上待存候〳〵、面上申談候はゞ虛生の苦惱を御免れ太上ノ眞樂自得なさるべくと存じ候、如何(全二、四四三頁)

とさへ言つてをる。こゝに藤樹學の齎らし得た悟道がある。かうした悟道は禪宗などではさまで珍とすべきでないかも知れないが、——勿論悟入の告白は主觀的な要素の强いものであるから、その深淺の度を客觀的に評價することは極めて困難であらう。——それらはたとひ主觀的には絕對的な獨創的な體驗であつても、歷史的に

は中世以來少からぬ大德等によつて幾回もくり返されたところで、藤樹の場合の如く近世的儒敎の立場に於てこれだけの境地に到達し得たことは歷史上にも比類少きものであらう。吾人はこゝに少くとも近世的悟道の歷史的意義を認めざるを得ない。

陽明全集を何等かの形で日本へ紹介したといふだけならば、既に或は同時に林羅山がやつてゐる。慶安元年戊子所筆の一節には「近年王文成公全集至自明船者多」（羅山先生文集卷二、四九九頁）として、當時同全集の舶載されること多きを物語つてをり、正保四年所筆にも「陽明全集可考以知焉」（全二、四三四頁）と記してゐる。慶安元年は藤樹の四十一歲に當るから、藤樹學勃興の影響として同全集の輸入が增加したと解釋する人も出ようが、前に述べた如く、眞の體認と唱道とが三十九歲たるべきこと、當年の藤樹書院が地理的にも生徒數に於てもさまで有力でなかつたこと、近年の語が必ずしも最近一、二年に限定さるべきでないことなどを考へれば、藤樹學の結果と見るべきではなからう。

陽明の學問に就いて研究したといふだけならば、より早く惺窩や羅山が指を染めてゐる。羅山が正保四年に筆したところではあるが、

惺窩謂余曰、陸象山王陽明聰明相若見解相若氣質亦相似、但陽明文章優於象山、象山自孟子先立其大者之語、而發明自謂道在此矣、陽明自孟子良知良能之語、而發明自謂道在此矣(二、四三二頁)

の如きは、惺窩の歿年が元和五年にして、羅山三十七歳、藤樹十二歳の事であるから、王龍溪語錄に於て初めて陽明學の一端を知り得た藤樹の三十三歳に先つこと二三十年、羅山が始めて惺窩に謁したのが二十二歳であるから、嚴密には二十一年以上三十六年以內の出來事であらう。其他羅山文集第二冊の三八〇頁、三〇六頁、四三四頁、三九九頁、四〇〇頁、四〇四頁、四〇八頁等に陽明の學說が散見してをり四一五頁には陽明の門人王心齋の說を引いてゐる。若し夫れ日本に於て始めて王陽明の名を紹介したものは禪僧桂悟を以て擬すべきであらう。(漢學紀源卷二、五八〇頁、桂悟第二十七)明の正德八年癸酉五月、陽明四十二歳にして、門人徐愛等と共に來つて「送日東正使了菴和尙歸國序」を贈つたその眞蹟は今尙本邦に現存するところである。

こゝに於てか陽明學史上に占むべき藤樹の地位は、單なる紹介者といふに求めらるべきではなくて、敎學の信奉者であり、眞の體認者であり、陽明主義の敎育家であると共に、更に之を日本化し、藤樹化したところに考へられなくてはならない。

王陽明は行狀記に所謂「初溺於任俠、再溺於騎射、三溺於詞章、四溺於神仙、而五溺於佛氏、正德丙寅始歸正于聖賢之學」したものといはれるが、藤樹はその何れにも溺れることなく、前述の如き修養を經て、終に致良知の學に歸したのである。この點からも亦陽明學に對立する藤樹學の特異性が考へられねばならないであらう。

## 第五節　大成期の藤樹學

かくまで進んだ藤樹の敎學は非凡なる敎育的活動となつて現はれた。「如仰初學のうちハ影をとらへ風をつかむごとくなる物にて候、然共本來易簡直截にして天然自由の本體を存する事に候へば渴飲飢食にことならず候、只意念の惑に因てとり入がたきやうに候間必聖人とならんの志を專御立可被成候」（三十九歲、與岡伯忠、丙戌秋、全二、五〇三頁）とか「眼力も精力も少も不入物にて御座候、只志だに切に候へば何の手間もいらずとり入なる御事に候」（丙戌秋、答吉田、全二、五二八頁）とかいふのはその一例である。同年の冬、橫山子に與へて、火災を見舞つた時にも「乍去これに因て本心を御取失ひ不被成樣ニ御用心尤に存候、若心動き明德のさはりになり候はゞ盜におひとやらんにて候」（全二、四一一頁）と書き添へてゐる。大成期の藤樹學とそれに基づいた敎育法とが、この種達人的な言說の中に窺はれる。藤樹規時代の支離と格套とは完全に超越され

たのである。吾人は彼が大成期の作品を讀むとき特に身についた聖學であつた感じがする。西博士が晩年の書簡數章を引用した後「凡そ此種の敎導垂示こそ實に藤樹の暖皮肉、猶名醫の病に應じて藥を與ふる識見手腕の如きもので、活道德家たるの面目躍如たる所、近江聖人の企及すべからざる所であらう。」(前掲二八四頁)といはれ「修養の工程に於て其人に就き其實地に臨んで能く岐路を辨へ、邪正淸濁を別ち進路の度を察し毫厘の謬千里の差を來たすの幾微を認めて應化のはたらきをなすに至つては自家修德の深厚なるのみでなく非凡なる敎育的天稟ならでは能はざる所であらう。」(同前)といはれたのは大成期の藤樹を正しく批評したものである。

陽明の致良知に對する上述の信仰は爾後二三年の生涯を通じて一貫したもので、戊子春、四十一歲、淸水十に答へた書簡の中にも、

大學の意と論語の意と二義なし、誠は良知の本體、意必固我を格し去て、良知の誠に歸るを意を誠にすると申候、王子の所謂格物致知卽誠意の工夫との給ふも大學の八條目に說下所の文勢も格致卽誠意の工夫、格致の外誠意の工夫なく候、此所明辨肝要ニ候此書中よく御讀候而其後中川氏と議論被遊候はゞ能御合點可參候(全二、五二六頁)

といつて門弟を導いてゐるが、三宅石菴の著はした書藤樹先生書簡雜著端の第九則には意必の意を以て誠意を解すれば病根生機を併せて俱に之を失はんとするもの、正にいはゆる噎ぶに因て食を廢するものであるとして、傳習文錄等に據つて藤樹の解釋に反對しつゝ、王子の書を玩んで精しく其の文義を解する者は恐らくは又是に因つて遂に藤樹を視て王子の學術を知らざる者とすることあらんといつた後に、石菴自身の藤樹に對する批評を述べて「是知る也、先生の先生たる所此に在り」となし、王子致知誠意の旨、虛しく其の文義を解するに於ては吾人或は精しく、先生或は未だ精しからざらむ。これを日用言行の間に考ふるに及んでは先生は能く合ひ、吾人は合ふこと能はざれば、孰れをか果して知るとし、孰れをか果して知らずとせんと斷じてゐるが篠原元博はこの斷案を以て、慧眼を具して藤樹の藤樹たる所以を捉へ得たものと推賞してゐる。（全二、三七三—五頁）

吾人も亦こゝに示されたるが如き、文辭に於ては必ずしも王子の義に合すると限らないが、その本質に於てその眞髓を捉へ得た藤樹の藤樹たるところに、學者としての藤樹の意義を見出さなくてはならない。學問の爲めの學問ではなくて悟道の爲めの學問であつたが、それと共に又はそこへ達する迄にその圈內に於て學問そのも

のも進歩して行つた。之が藤樹學の學風であつた。次代の伊藤仁齋はそれを遙に文献學的に進めたものであり、荻生徂徠は李王の古文辭を利用して更にそれを推し進めたものである。

前にも述べたやうに、格致に於て陽明の大學說をとり、古本に於ても陽明に從つて集註本をすてたところに藤樹學が大成し、藤樹の悟道も成就したのであるが、經傳の區分に於ては、朱子に從つて陽明をすて、意の解釋に於ても陽明も不及深考」として之に追從しない。藤樹は先覺を以て「心廓然大公ナルニヨツテ經解說話ノ己ニ出ルト人ニ出ルトヲ不問、唯其至當ヲ主トス」（大學考、全二、一二頁）と見て、眞理の愛好者としたから、各先覺の眞理をとり、誤謬をすてることを以て、各先覺の本意に合するものと見た。從つて「至當」と信ずる彼の立場から各先覺の諸說を取捨選擇することゝしたから、朱子にも陽明にも必ずしも偏らなかつたのである。茲に藤樹學の獨立性がある。

藤樹が中年孝經考を著すや「學者莫因文公之疑而疑今文、莫因溫公之信而信古文」からんことを說いて、今文を尊信して受用せざるべからざるを明かにした（全一、六〇四頁）が、三十四五歲にして孝經啓蒙を著すや、今文を棄てゝ古文を採つた。白文眞蹟本、假名書き孝經亦然り。

藤樹先生行狀によれば、藤樹淵氏に語つて、此の經の精義啓蒙に於て未だ盡さずと雖も、學者句讀によりて大意を見るに便である。（全五、六一頁）といつたとあるが、淵氏入門の三十七歳冬以後に於て、藤樹自ら精義未だ盡さざるを自覺したこと、並に「經旨ニカナワズトゝ改メ正サント欲」したことを知り得る。不幸短命にして其の意を果さなかつたが、吾人は藤樹學に於ける孝經學の三段階を區別せねばならぬであらう。第一は朱子學時代、第二は王學時代の初期、第三は藤樹學の大成期卽ちこれである。

若し夫れ「氣の一元を說く仁齋は仁愛に多く傾き、理を主とする程伊川は敬を主とし義を特に重んずる。藤樹は孝の裡に兩方面を收めてをる」（西博士前揭二七三頁）と見、更に「古今の宗敎道德に於て示された敎說の精髓は藤樹の孝の說の中に籠つてをると言ふも可である」（前同）とまで見得るならば――殊にそれが博士の試みられた如く殆ど第二期の翁問答に現はれたものだけでかくまでの意義を發見し得るならば、學德ともに異常の發展を遂げ得た大成期に於ては如何に目覺しいものとなつたであらうか。大成期の藤樹學を高く値踏みつゝある吾人は此の點に於て藤樹がその意を果さなかつたことを遺憾とする。

三十三四歳にして編述された翁問答が、年と共に發展し行く藤樹學を充分に代表

し得ないことは前述の如くであるが、大成期に入つてその一部が訂正されることゝなつた。慶安三年庚寅夏六月既望門人の記した改正篇の序によれば、

丙戌の年下卷一二篇を正したまふ。丁亥の年又これを改めんとす。病をもつての故にや、少きにして終に不成、同年上卷を改め書せんと欲す。わづかにして又果さず。（全三、二七八頁）

とあるから、甚だ不充分ではあるが之によつて丙戌卽ち正保三年三十九歳とその翌丁亥卽ち四十歳との藤樹學の一端を窺知することが出來る。この序文には或は「儒佛を論ずる處のごとき、今これを讀に其理精當を得ざる事を覺ふ。」（全三、二七八頁）といひ、或は「上卷吾孝經に觸發して筆を下す。故に頗孝字を播弄す。孝經の旨におゐては敢たがふ事あらずといへども、今これを撰ば又しからじ。」（同前）といふ藤樹の言葉を載せてゐるし、岡田氏本年譜には、同じく藤樹の言葉を揭げながらも、上卷をおいて下卷を貶し、

上卷ハ孝經ニ觸發シ其意ヲ寫シ書ス。故ニ其論穩當ナリ。下卷ハ世ヲ憤リ弊ヲ矯ム。是ヲ以テ其說抑揚大過アル事ヲ免レズ。故ニ先ヅ下卷ヲ改ント欲ス。（全五、二二頁）

と記してゐるから、三十三四歳の藤樹學が大成期に入つて、儒佛に對して精當となり、孝字を播弄(眞蹟熟語解に曰く「アゲモテアソブトヨム。モテハヤスヿヱ。」――全二、五九二頁)したり、世を憤り弊を矯めたりしなくなつたこと、並にかゝる進境を意識するに至つたことを認め得る。實際に於て改訂された部分は極めて僅かであるから思想的にも大差ないのであるが、明かに進展の迹を物語つてゐるところもある。例へば、慶安二年本で「孝經一卷を心にて心をよみ、よく學候へば」(全三、一七七頁上段)とあるところを同三年本で「孝經大學中庸を心にて心をよみ云々」(同頁下段)と訂正された上、四十歳の改正篇では「孝經大學中庸をよき先覺にしたがひて學びたらば人の明暗によりて遲速ありといふとも云々」(全三、二九〇―一頁)となつて、獨學的態度をすてゝ先覺に從ふことを一の條件としてゐる。先覺としての體驗と自信とが強く藤樹に起つたからであらう。

此の他大成期に入つた藤樹學に就いては中庸續解・古本大學全解を初め當年の書簡や斷片的な經解など注目すべきものも少くないが、希望が多くて年が足らず健康が惠まれなかつた爲めに執筆の途中又は意志のみあつて着手されずに終つたものも少くなかつた。是等の一班については全集解題に比較的努力が示されてもをる

から詳細は後日に讓ることゝする。唯藤樹學を後の仁齋學や徂徠學に比較する場合前述したところの外、直ちに氣のつくことは、同じく日本的儒敎ではあるが、後者が漢唐宋明の學風から意識的に離脱して、先秦の原始儒敎に直接せんとしたに反し、前者は經學としては宋明先覺特に主として陽明の學風に意識的に依據したものであつたといふ事である。こゝに吾人は日本經學史の獨立性が前代より藤樹を經て、更に次代の仁齋、徂徠へとその濃度を高め行いたことを認めねばならぬ。藤樹學の個性は寧ろ彼獨特の體驗に基く孝道や修養の功夫や悟道や敎育やに最も顯著に現はれてゐると思ふ。

## 第四章　結論

### 一、

藤樹の敎育的活動を考察する時、その最大の努力を傾注したものであり、且つ最善の効果を收め得たものであるのは、いふまでもなく、藤樹が藤樹自身を敎育したことである。そこには上來述べ來つた如く定れる師もなく、有益な友もなく、歷史的文化そのものも彼の環象としては、大都會に於けるそれの如く高きものはなかつた。そ

の間に於て、個性と環境との許す限りに於て、終に學德一世に輝く近江聖人としての全人格を鍛へ上げた生涯の努力こそは、さながらに敎育活動の本質を示すものである。以上三章に亘つて述べ來つた藤樹學發展の敎育史的意義は先づこゝに求められねばならない。

熊澤伯繼の成功を以て彼の敎育の結果と見る、亦必ずしも誤とはいへないがそこには藤樹なくしても自ら發展し得べき異常の力があつたことも考へられるし、直接の感化は必ずしも長く且つ大いなるものではなかつた。藤樹が生涯を捧げて自らを鍛へ上げた自己敎育こそはその幾百倍の努力を傾倒したものである。藤樹敎育の主要の點は是非ともそこに見出されねばならない。吾人はそこから多くの優れた敎育的原理をさへ引き出すことが出來るであらう。

彼の自己敎育によつて藤樹學の發展すると共に、その根本論の上に、彼の敎育思想がどんな風に滲み出たか、そしてそれが實際敎育的活動となつて如何なる敎育史的意義を創り出したかは、上述三章の中にも時に應じて注意して來たが、朱子學的藤樹學の時代には敎育も亦、朱子學的格套に捉はれてをり、敎育綱領も亦その圈內を離脫することは出來なかつた。年と共に根本思想の動搖するにつれて敎訓的な書簡で

も教科書用の著述でも佛教信者に對する態度でも凡てその動搖を示して來る。やがて陽明學的藤樹學の大成期に近づくに從つて、教育的態度が、愈圓熟し來るのは顯著なる現象である。

他方に於て彼の教育的活動が實際に進み行くと共に、彼の教育思想も、彼の根本思想も將た又彼の全人格も進展したことを考へねばならぬ。例へば二十歳にして中川貞良の輩が彼に就いて學び初めたといふことが、彼をして聖學を以て己が任とするといふ藤樹學勃興の主導因となつたこと、大野了佐の求めに應じて醫學を教授したといふことから、教育的原理とそれに對する確信とを得、それの力によつて彼の悟道をも早め得たこと、同志の集合である藤樹塾はそれに對する教育思想を規定して藤樹規となり學舍座右戒となる。それは同時に彼をして聖人立教の宗旨を推本し、參ふるに白鹿洞規を以てして、終に三十二歳當時の藤樹學を組織させることゝなる。更に同年秋門人の爲め論語を講ずるや、鄕黨の篇に至つて大に感得觸發した。かくして學問史上の鄕黨啓蒙翼傳は成つたのである。或は又豫方の同志の求に應じて教科用書としての翁問答が著述される。而もそこには三十三、四歳迄の藤樹學は淸算され、且つ發展させられて、彼の文武論も異端論も神道論も教職論も、愼獨論も孝道

哲學も確乎たるものとなる。或は彼が格套を離脱するや敎育方針を變更したといふが、その結果として門人が大いに觸發興起したといふ事實は逆に藤樹の朱學否定觀に體驗的基礎を與へたであらう。更に伯繼に於て性命の友を得たりといひ、三十七歳の冬、初めて來り謁した淵岡山が「聰明才智亦有不可企及者」を以て彼を批評したのを自ら恥ぢて「吾常恐以聰明才智加人、務韜藏之、猶不免有時發露、彼之所以美吾者、卽吾之所以自耻也」と歎じたるが如き、凡てこれらの事は凡そ偉大なる敎育家の哲學を理解する爲めには彼の敎育活動そのものをも考慮に入れなければならぬことを示すものであり、一般に敎育史の研究を無視しては思想史や哲學史は正しく理解されないことを主張する一の材料となるでもあらう。

## 二、

慶安元年戊子、四十一歳、秋八月二十有五日、朝卯時江西藤樹の下に於て、その病革るに及ぶや、机によつて端坐し遠く婦女を去らしめ、門人を召して曰く「吾去矣、誰能仕斯文者也、噫」（川田氏本年譜、行狀には「此道ノ任誰カアル、嗚呼無哉」とあり、行狀聞傳亦同じ）と、言畢り瞑目して終に白玉樓中の人となつた。門人爲めに相會して文公家禮を用ゐ之を小川邑玉林寺の側に葬る。備前侯訃を聞き、其の臣熊澤伯繼をして來り賻せしめ、隣里鄕黨亦老を

扶け幼を携へ涕泣して柩を送ること、親戚を喪するが如く、後、邑人其の宅を修めて祠堂と爲し、長く春秋の奉祀を廢さなかつた。

「吾去矣、誰能任斯文者也、噫」といふ臨終の言葉には暗に藤樹學の永續性が主張されてゐる。この主張こそは實に藤樹が全教育的活動の基礎となつたものであるに相違ない。而も噫といひ、嗚呼無哉といふ歎息から推測すれば、多年の努力を以て養成し來つた門弟を省みて斯文の爲めに一脈の悲哀を感じたものであらう。この言葉は必ずしも彼のみに限られたものではないが、常人の言葉を口頭だけで借りない藤樹のことでもあり教育家的立志が聖學の興起にあつたことでもあり、三十三歳菅廟に題して「斯文興起冀神助」(全一、八九頁)と歌つた程であるから、眞面目に考へて然るべきだらうと思ふ。果して然らば吾人は彼の歎息の豫言性をその後の歴史的事實に於て吟味しなくてはならない。

彼が歿後の藤樹學の根據地又は代表者を數へて、一小川村の藤樹書院、二大洲藩、三蕃山並に岡山藩、四淵岡山派、五常省先生等を考へることが出來る。而も大洲藩はその後間もなく僧盤珪の德化に勢力を奪はれ、(全五、二九九頁)蕃山は目覺しい活躍を見せつゝも數年にして隱退し、岡山藩は閣老等の壓迫によつて少くとも表面は朱子學に

變り（全五、二四七頁）淵岡山派は忠實に學統を傳へたが、偉大な人物も出ず、社會的にさまでの力をもたず、僅に守成維持を本質としたに過ぎない。（全五、卷之四十六）常省先生の業績も亦岡山派に準じて考へらるべき傾向をもつ。（全五、卷之四十七）後年川田雄琴を迎へて大洲の陽明學が復活した如く、歴史的には佐藤一齋・大鹽中齋・春日潛庵の活躍とそれ等日本陽明學派の直接間接の學祖としての藤樹の地位とを考へねばならないが、それは遙に後のことであつて、藤樹の歎息に接續する歿後の歴史は亦別に考察せられねばならない。（白石や春臺への間接の影響も亦こゝでは省略せらるべきであらう。）

この點に關して吾々は熊澤伯繼の率直な批評と告白とを省みる必要がある。

中江氏ハ生付て氣質よ君子乃風あり、德業を備へゑる所ある人なりき。學は未熟よて異學乃ぼいゑもありき、五年命のひゑらゐしりは學も至所よ至へき所あゑしなり。中江氏存生乃時は予を始として皆粗學乃者ゑもなれゑゆるさるゑき者一人もなりしよ中江氏の名よよつて江西乃學者れ名の實よ過ゑるゑと十百倍なゑはぼいゑもまゑ大なり。

といふのが、藤樹と當時の江西學派とに對する集義外書の記述である。（卷六）

伯繼は又集義和書に於ても「江西の學によつて天下皆道の行はると云ふ事を知れ

り。儒佛共に目を付加へたるは大なる功なり」（卷第十一）といふ朋友の質問に答へて、

尤も少しは益もあるべけれども害も亦多し。しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで、管見を是とし、異見を立てゝ異學といひ、愚人をみちびく者出來ぬ。江西以前には此弊なかりしなり。天下の人目をさましたりと雖も、未だ德を好むの人を見ず、粗學の自滿のつひえは一二にあらず。（外書卷之八にも大同小異）

と慨歎してゐる。こゝに吾人は朋友の質問中に主張せるが如き江西學の齎らした史的意義の一面を見ると共に、更に粗學の自滿のつひえを超越してしかと經傳に卽して道を說く底の學問意識を基調とする文獻學的な復古運動の起らざるべからざることを暗示される。

實にや藤樹の歿後幾何もなくして、近世の思想史並に敎育史の本流は寧ろ朱王兩派を離れて、素行・仁齋・徂徠の復古主義へ傾いて行つた。素行學の歷史的意義は比較的輕く、徂徠學は仁齋の後を承けたものであるから、惺窩・羅山に興起した朱子學、藤樹に勃興した陽明學に繼いで、近世思想史の先頭に立つたものは主として仁齋を推さねばならない。而も仁齋學の背景としての藤樹學の影響は極めて微々たるものであつて、藤樹歿後十九年の寬文七年丁未閏二月初五に於ける私擬策問に「近世王氏之

學、以致良知爲其宗旨、昔時已盛行於世、蔓衍瀰漫、延及於吾國」とあるのが、管見に入つた凡てゞある。（尤も我が國に延及したが故に仁齋學の基礎として朱學に次いで王學が重要な要素となつたと解すれば、延及の最功勞者たる藤樹の間接の影響を考へねばならぬことにもならう。）

私は却つて安原貞平等が藤樹學から古義學に改宗して伊藤東涯の高弟となつたところに、或は又、享保丙午夏六月、邑人の囑に應じて作つた貞平の藤樹書院記が、篠原元博によつて「娓々累數百言、畢竟說出骨髓不着、以其非湖學之派也」（全五、三八一頁、湖學紀聞）といはれる性質のものであつたところに、將た又東涯・蘭嶋・奥田三角等を招いて古義學を講ぜしめたところに（全五、三八五頁）重要なる歷史的意義を認める。それは藤樹學の淵叢たるべき藤樹書院そのものを古義學派化したもので、こゝに藤樹學派から古義學派への歷史的推移を鮮かに物語つてゐるではないか。中村伯常が享保十四年六月二十八日孝經講釋聞書の跋文に「今幸同邑安原貞平博識强記、而倡子弟會藤樹講堂、講習四書、不亦說乎、願子孫永不廢學也」（全二、二四二頁）と記してゐるのも小川村に於ける貞平の古義學的活動がその地の有識者によつて如何に悅ばれたかを示すものに外ならない。

江西書院聞名久、　五十年前訓義方、
今日始來絃誦地、　古藤影掩舊茅堂、

この人口に膾炙された伊藤東涯の題詩は藤樹歿後七十二年にして其の遺風餘烈の彼をしてかく歌はざるを得ざらしむるものゝあつたことを示すものであると共に、學派的見地に立つて見れば、藤樹學の時代は既に過去の追懷となつて了つたことを、(而してその反面から極言すれば今やこの地も東涯學の風靡するところとなつたことをも)示すものである。全集編纂委員小川喜代藏氏が「霖寰の德望と學殖とは同志の景仰して措かざるところ、而して霖寰先師の講堂に於て古學を講じ以て先師に背く所以なるを曉らず。享保六年八月東涯の來謁したるが如きも實は霖寰の方寸に出でしや論を俟たず。その堀河學の爲にせる至れりといふべし」(全五、三二二頁)と義憤を發せられたのは、氣慨ある藤樹神社の社司として無理からぬことであらうが、吾人はむしろ上述の歴史的意義に、より多くの學術的關心をもつ。

偉大なる藤樹の學と德とに對しては更に色々の方面から考察することが出來るであらう。私は今、代表的先覺の思索の尖端を辿つて近世思想史を考へ、その根本思

想の上に滲み出る教育思想並にその實際教育的活動を捉へて、近世教育史を考へんとする試みへの一の準備として藤樹學の片鱗を窺つて見たに過ぎない。從つて他の部分的研究の進むと丶もに、更に書き變へられてその組織の中へ織り込まるべきである。(註)而も極めて重要なる大成期の藤樹學並に藤樹塾の教育に就いて細說しなかつたのは、後日別にまとめたいと考へたからである。

註　同樣の試みに對する左記拙稿を參照されれば幸甚である。

一、近世の日本儒學に於ける古代主義精神の發展—特に代表的先覺の心理的過程—(日本心理學會第二回大會報告)

二、山鹿素行に於ける古學思想の發達(本誌)

三、山鹿素行に於ける士道論的思想の發達(本誌)

四、伊藤仁齋に於ける古義思想の發展とその上に立つ教育思想(高瀨博士還曆記念支那學論叢)

五、伊藤東涯に於ける仁齋學の發展(三宅博士古稀祝賀記念論文集)

## 附　言

比較的短日月の間に、蕪雜ながらもこの一篇をまとめ得たのは、主として「藤樹先生全集」が確實な史料と理解ある解說とを提供してくれたお陰である。元來藤樹の眞蹟類は伊藤家のものなどと違つて、僅かしか現存しないのであるから、それだけの程度に於て確實性に乏しいのであるが、吾人の現在有ち得る限りに於ては右全集がその殆ど全部を提供してゐてくれると見てもよい。(藝文本年九月號拙稿藤樹學と「藤樹先生全集」參看)尙、この研究の爲めに直接間接厚意を寄せられた恩師先輩に敬意を表すると共に、特にこの論文の草稿を精讀して忠言を惠まれた全集編纂主任加藤盛一氏に深謝する。尤も同氏の讀了後も自由に增補訂正したのであるから本文に就いて同氏が責を分つべきでないことはいふまでもない。(昭和四年十一月三日明治節之朝、擱筆於筋違橋之寓居)